

博士学位論文

<要約>

未分化な体験世界を生きる子どもとのプレイセラピーにおける
治療者の意識過程

2019年

藤巻るり

自閉症スペクトラム障害（以下、ASD）には、対人相互性や象徴機能が成立していないため、プレイセラピーは有効でないという考え方がある。深い治療関係やクライアントの主体的な象徴表現など、プレイセラピーの精神力動的な治療的機序が期待できないからだ。また一方で、ASDをはじめとする未分化な体験世界を生きるクライアントに対しては、心理療法を通して「主体／他者」などところにおける「二」の構造の成立を目指す、という新たな心理療法の在り方も提唱されている。実際に、多くの心理臨床の現場で ASD 児のプレイセラピーが行われており、時には思いがけないほど功を奏することがある。そこでは従来のプレイセラピーの枠組みでは理解しきれない独特の治療的機序が働いているのではないだろうか。

本論の目的は、ASD 児をはじめとする非定型発達の子どものプレイセラピーの背景にある独特の力動について検討し、その治療的機序を明らかにすることである。幼児や ASD 児とのプレイセラピーにおいて、クライアントの体験世界に沿うという心理療法的態度の結果として、治療者自身も一種の退行した意識状態になることがある。いわば「人」としての輪郭が緩み、子どもと治療者は、互いが自他未分化な世界の一部として出会うのである。治療者自身が子どもと同じ地平に立つことができるならば、「二」以前の世界に「二」が成立する過程を、当事者として内側から記述し、検討することができるのではないか。このような問題意識から、本論は治療者の意識過程に焦点を当てる。

第 I 部（第 1～5 章）では、ところにおける「二」の成立過程という視点から ASD 児の体験世界の特徴をつかみ、「二」の成立をうながす心理療法の実際について論じる。

第 1 章では、ところにおける「二」の成立に関わるさまざまな心理学の理論を概観し、「二」以前の体験世界に「二」が成立する過程を包括的にとらえる。

およそ一世紀前に Piaget と Wallon の間で繰り広げられた論争は、「二」の成立を巡る議論であったと思われる。両者の発達論が大きく異なっていたのは、「個」や「社会性」のとらえ方の違いに由来していた。Piaget は主客の分離を前提として、すでに個体である子どもがいかに環境に適応していくかを論じたのに対して、Wallon は子どものところが主客未分化な状態から実在の他者とのやり取りを通していかに主体として分かれていくかを論じた。Piaget は「二」を前提とした心理学であり、Wallon は「二」以前の体験世界から出発して「二」の成立過程を問題にした心理学であるといえるだろう。

ところにおける「二」の成立を論じる心理学は、その後の Stern, D.N. の自己感の発達論、

Trevarthen らの間主観性の発達論などの中にみることができる。新生児の体験世界はすべてが区別なく地続きにつながっている。子どもは何が起きているのか、それが誰に起きているのかも曖昧なまま、状況と一体化して身を揺さぶられる形で物事を体験する（新生自己感）。生後 2 カ月頃までに他者からの視線や呼びかけに気づくようになり（視線触発）、それをきっかけとして、身体的なまとまりの感覚が生まれ（中核自己感）、他者と情緒的な響き合いのやり取りができるようになる（第一次間主観性）。やがて生後 9 カ月前後から他者と興味関心を共有し、相手の情動状態を感じ取って伝え合うなどこころの雛型が完成し（第二次間主観性：間主観的自己感）、そこから言葉を介した意味の世界へ移行する（言語的自己感）。

このように、子どもは他者との相互的な関わりを通して自らの内側に「二」の構造を獲得する。その過程は一足飛びに起こるわけではなくそこには「一」とも「二」ともいえない揺らぎのような段階がある。河合俊雄や Giegerich の主体の発達論においても近代的な主体の成立の前段階として、土台と地続きの主体の段階がある。Winnicott はこの「一」と「二」をめぐる矛盾に満ちた過程を移行現象として描出している。

第 2 章では、「二」の成立過程の視点から ASD をとらえ直す。ASD は原初的な対人反応性、つまり人を「人」として体験することに困難を抱えている。他者からの働きかけに気づかず（視線触発が発動せず）、こころの発達における「二」への動きが始まらないため、その体験世界は新生児のように手つかずの状態に留まる。そこには未だ主体も対象も存在せず、すべてが地続きにつながっているのである。ASD の対人反応性の欠如は、情緒面の発達のみならず、認知や行動特性の発達にも影響する。それは定型発達者が社会的に共有された“意味”によって分節化された世界を生きているのに対して、ASD は人を介さない直接的な形で世界との関係を築くためである。

ASD は社会性の障害といわれるが、「社会性」を対人スキルのような発達の成果ととらえるか、生理的なレベルも含む対人反応性という発達原理ととらえるかによって、ASD へのアプローチの仕方に大きな違いが生まれる。前者は個体の社会性を目指す療育訓練的アプローチにつながり、後者は主体の生成を目指す心理療法的アプローチにつながるだろう。本論は ASD を「二」の萌芽である対人反応性の障害ととらえ、「二」の成立をうながす心理療法的アプローチを模索する。

第 3 章では、「二」の成立を目指す心理療法の現状を整理し、クライアントの体験世界

に沿う一般的な心理療法の枠組みが、ASD 児に対して持つ治療的可能性を指摘する。

子どもの体験世界に沿うプレイセラピーにおいて、「二」以前の体験世界を共有することはそれほど難しいことではない。しかしそこで起きていることをとらえる視点が旧来のままであると、自分が実践していることの意義が掴みとれずに、どこかでつまづいてしまう可能性がある。従来の心理療法は「二」の構造を前提としているため、「二」以前の体験世界を扱う理論は発展の途上である。我々プレイセラピーを行っている心理療法家は、「二」以前の体験世界を生きる子どもとの臨床体験から、それ独自の治療的機序を考える必要がある。

本論は、子どもの体験世界に沿うことによる治療者自身の退行を「地べた意識」と呼び、積極的な意義を認める。「人」という共同体的な次元が成立していない ASD 児らの体験世界に「人」という次元が成立するためには、それ以前の未分化な状態から始める必要があると考えるからだ。子どもと地続きの世界に入り込むことで、治療者も原初的な「二」の成立過程に当事者として参与する、という本論の基本的な考え方を示す。

第4章では、第5章以降の議論の素材として、「地べた意識」のプレイセラピーの三つの自験例（ASD の3歳男児の事例、環境因の影響の大きい非定型発達の3歳女児の事例、ASD 男児の児童期から思春期にかけての事例）を提示する。

第5章では、ここまでの議論を踏まえ、前章の三つの事例を題材として、具体的なシーンを取り上げながら「二」の分化過程について論じる。そこでの治療者の意識は「二」が生成される場として全てを包み込みながら、その中で「二」の片割れを生きるような、重要な役割を果たしている。

例えば、常同行動や独語すら共有するような地続きの関係が成立した時、そこにふとした接触が起こると、自閉的なリズム（「一」）が濃密な間合い遊び（「二」）に転じることがある。自閉性と原初的な間主観性という一見正反対のものが限りなく近いなど、「二」の分化に関わる心理療法過程は矛盾に満ちている。二人のやり取りを通じて「二」を内包した「響き合う一なる世界」が生まれ、それが変容していく過程を、響き合い・リズム、区別・差異化、自他の局在化、の三つの相に分けて検討する。

また、「二」の生成過程に「響き合う」という要素が不可欠であることの証として、同じ「一なる世界」でも響き合えない世界である統合失調症的世界との同一性と差異については、事例2を通して検討する。

さらに、「地べた意識」のプレイセラピーで生まれた主体は、場と地続きにつながりながら脈動する動きとしての主体、世界に包まれた神話的主体であり、本当の意味で主体として誕生するには、この「一なる世界」を断ち切る必要がある。事例3の思春期男児の事例を通して、本当の意味で「二」が成立するために不可欠である治療者の意識の否定の契機についても検討する。

第II部（第6～8章）では、第I部で扱った「二」以前の心理療法の治療的機序について検討する。

第6章では、「地べた意識」と場について論じる。「地べた意識」という治療者の意識過程は、子どもの未分化な体験世界への同化であると同時に、心理療法という高度に構造化された場を成立させるという相矛盾した二重の機能を担う。その構造は、一般的な心理療法とどのように異なるのか、能の舞台や錬金術の器を参照枠として論じる。

また、「地べた意識」のプレイセラピーにしばしば登場する「小空間」は、その中に入る者が個になっていくことをサポートする空間でもあり、これについては「二」以前から「二」への移行現象を担う「移行空間」として論じる。

第7章では、「地べた意識」のプレイセラピーの力動性について論じる。ここまで述べてきた「一」と「二」をめぐる矛盾に満ちた力動が、中動態という概念でとらえられることを示し、それが心理療法における「力動」という概念の射程を広げる可能性を指摘する。

「地べた意識」は、自／他の区別が生じつつある動的な意識状態に身を置く試みであった。中動態は、主体や対象が「生成し変化する過程」や、そのような分離にいたる潜在的な「二」が「差異化しつつ、しかも見分けがたく一つの全体」をなす過程を表現し得る概念であるという。「二」以前の世界で生じている動きであり、同時に、「二」の成立へとつながっていく動きでもあるとするならば、それは「二」以前の心理療法の治療的機序をとらえる概念といえるだろう。

「地べた意識」のプレイセラピーにおいては、ラポールも一般的な心理療法と意味が異なる。治療者と子どもは一つの項（主体）である以前に、まずは「場」の構成要素としてつながり、そこから互いに「人」として、「個」として、分化してゆく。「地べた意識」のプレイセラピーにおけるラポールとは、主体と主体の関係ではなく、いわば主体がその中から生み出されることになる中動態的な動きへの参入なのである。

一般的な心理療法は、クライアントという主体に対して治療者というもう一人の主体が

向き合うことで、弁証法的な力動が動き出す。これに対して「地べた意識」のプレイセラピーは、治療者が個であることを括弧に入れて場に練り込まれることで、個が生み出される矛盾に満ちた力動が動き出す。この主体を生み出す中動的な力動こそ、「地べた意識」の治療機序といえるだろう。心理療法における「力動」という概念は、自らを「弁証法的な力動」のみならず「中動的な力動」にまで射程を広げることで、「二」以前の心理療法にも対応しうる新たな概念となるのではないだろうか。

第8章では、「地べた意識」の意識化の契機について論じる。

ここまでは治療者の意識水準が低下して子どもと同じ体験世界に入り、そこで相互作用し、変化が起きることに焦点を当ててきたが、実際の治療においてはその過程を意識化する契機が不可欠である。社会で彼らがどのように生きているのか、どのように生きていくのかをサポートするためには、治療者は「一なる世界」の内側で関係性の変容を共に生きるだけでなく、その成果を「一なる世界」の外側につなげていかなければならない。「地べた意識」のプレイセラピーでは、起きていることが出来事として形を成していないため、意識化されないと、極端な場合には何も起きていなかったことにさえなりかねないからだ。治療者は起きていたことを、体験の内側からとらえることで意識化（現実化）するのである。

「地べた意識」のプレイセラピーで起きている出来事は、既存の言葉で記述することができないような微細なニュアンスを含む。自明な意味が成立する以前の世界を言語化する取り組みは、「未構成の経験」や「体験過程」など、意外にも大人の心理療法において概念化されている。それらはクライアント自身の意識化（言語化）について扱っているが、「地べた意識」のプレイセラピーで意識化を行うのは治療者である。治療者が未分化な世界の一部として過程に練り込まれ、そこで感じる（sense）ことの意味（sense）をつかむことが、子どもの生きている未分化な体験世界を社会的文脈につなげる作業であることを明らかにする。